ニューヨーク事務所

カーネギー・ホールの隣が
ニューヨーク事務所のあるビル

多くの人々に現代文学の魅力をアピール
日本研究者ネットワーク支援も積極的に

日本の現代文学の魅力を全米各地の幅広い人々に紹介する目的で、作家の多和田葉子氏と桐野夏生氏を招へいし、それぞれ東海岸５都市と西海岸５都市をめぐる講演・朗読会を実施しました。会場となった各地の大学、書店、読書クラブや図書館では、参加者との間で活発な意見交換が行われました。また、日本文化に触れる機会の少ない地方向けには、南部５大学巡回映画上映会を実施、各地で好評を博しました。

公演については、Performing Arts Japan（舞台芸術紹介日米共同事業）の事務局として、山海塾北米12都市ツアーなど５件の巡回公演、「トリシャ・ブラウン／岡崎乾二郎『I Love My Robots』」など５件の共同創作を支援しました。また、在米日本専門家中南米派遣事業の一環として、米国で活躍する３公演団を含む５つのグループを８カ国14都市に派遣しました。

さらに、米国アジア学会年次総会など国際会議・シンポジウムの機を捉え、日本研究者のネットワーク形成を積極的に支援しました。

作家・多和田葉子氏（ブラウン大学で）

Close Up

所長　**辻本　勇夫**

アメリカ合衆国の中にある海外事務所は全米の日本語事業を担当しているロサンゼルスと、日本研究や知的交流に関する事業を担当しているニューヨークです。ここには日米センター（ＣＧＰ）という、日米が協力して知的交流や市民交流を推進するユニークなセクションも併設されています。一方芸術交流はＮＹとＬＡでアメリカを東西に分割して担当しています。

ニューヨークにいますと、アメリカとの文化交流とはいったい何だろう、とよく考えます。アメリカは世界中から人が集まって作られた国です。その中でもニューヨークでは、毎日さまざまな人々と出会い、その背後にあるさまざまな世界に思いをはせることになります。

一方、アメリカ人自身が、いつも自らの影響力を意識したり世界中の人々に思いをはせているかというと、どうでしょうか。アメリカは世界を取り込んでできあがった国でありながら、時として世界から孤立してゆく傾向があるかも知れません。

日本とアメリカの交流とは、双方がお互いを見つめあいながら、同時に一緒に世界のことに思いをはせてゆく、そんな相互啓発の作業ではないか、と考えています。

ロサンゼルス事務所

日韓アニメ映画上映会・パネルディスカッションを実施

エンターテインメント産業の中心地ハリウッドにおいて、アメリカン・シネマテーク、韓国文化センターとの共催によりKorean & Japanese Animation Todayと題するアニメ映画の上映会および監督、プロデューサー、評論家によるパネルディスカッションを行い、イベント実施２週間前に予約を締め切るほどの盛況となりました。

また、高知県から手漉き和紙職人２名を招き、ロサンゼルス、デンバーといった大都市に加えアイダホ州やモンタナ州といった普段なかなか日本文化に触れる機会の少ない地方でもレクチャー・デモンストレーションを行い、伝統工芸の世界を紹介しました。

『時をかける少女』の細田監督と、AACHI & SIPAKのBum-JinJoe監督

日本語教育専門図書館
「にほんごライブラリー」

サンパウロ日本文化センター

バラの館庭園（州文化財）とセンターのあるビル

連続講演会「味覚の知恵」シリーズを開始

世界各国が注目する日本文化の一つ、和食。当センターでは同テーマにスポットを当て、2006年秋から連続講演会の企画をスタートさせました。「ヴェージャ・サンパウロ」紙の食文化エディターであるアルナルド・ロレンサート氏（文化人招へいプログラムにて訪日）による和食紹介で幕を切り、その後もテーブルマナー評論家のルミ・トヨダ氏による和風エチケット、サンパウロ大学日本文化研究所教授の森幸一氏による日系移民食文化史、和食シェフ（村上ツヨシ、アドリアーノ金城、カルロス・リベイロの3氏）による対談と、計4件の講演会を実施しました。既存のブームを加速させるだけでなく、「和食」がブラジルで長く愛されるように、2007年度も本シリーズを継続させます。

その他にも、第27回サンパウロ国際ビエンナーレへの日本参加（キュレイター長谷川祐子氏、島袋道浩氏とアトリエ・ワン（塚本由晴、貝島桃代の両氏））やカラオケ日本語学習キャラバン2007、日本哲学討論会などを実施しました。

これらの事業は2006年度から発行されている機関誌「TOBIRA（扉）」にて広報しています。

カラオケ日本語学習キャラバン　全国大会（サンパウロ）入賞者の面々

Close Up

所長　西田 和正

サンパウロ市には大小合わせて約600軒の和食レストランが存在し、日本食文化がブラジル人の生活の中に根付いています。このことからも、日系移民の百年に渡る歴史がブラジルの経済・産業面だけでなく、生活の重要な面においても如何に影響を与えているかが分かります。150万人という日系人社会が形成されているブラジルにおいては、単なる日本文化紹介では注目を集めることはなく、もって何が求められているかをよく分析した上で事業を実施しなければなりません。当センターが2006年度より開始しました食文化シリーズは、今や日系六世が誕生し世代交代が急速化する中で忘れ去られていく日本文化の要である食に焦点を当て、講演、対談、デモンストレーションを通して日本食文化とそこに秘められた精神論を、2007年12月までの一年半に亘って紹介しています。

一方、日系人の世代交代が進む中で日本語離れが進んでいます。この状況の中で、非日系ブラジル人を含めた若者たちに日本文化・日本語に興味を持ってもらおうと、若者の間で人気の高いアニメ・漫画、コスプレ等のポップカルチャーを活用した「カラオケ日本語学習キャラバン」を企画し、ブラジル全土において実施しました。日本語を如何に楽しく理解してもらうかに主眼を置いたこの企画は、新たな日本語学習方法であるとして各日本語教師の間で取り入れられつつあります。これからのブラジルにおける日本語教育は継承日本語教育から外国語としての日本語教育に替わっていくことから、きちんとした日本語教育が求められています。

2008年はブラジルに日本人が移住してから100年、一世紀という歴史的な年を迎えます。同年は日伯交流年でもあり、これに相応しい文化交流事業を実施していきたいと思います。

トロント日本文化センター

カナダ全体への日本語教育促進に尽力
現代の日本デザインを伝える試みも実施

戦後から現在に至るまで日本の少女漫画界に最も貢献のあった23名の作家による200点余りの作品展を開催しました。桂小春團治氏による、英・仏語の字幕による古典落語公演をカナダ4都市で行い、好評を博しました。当センターのホールにて陶磁器デザイナーの森正洋氏の作品展を実施し、同時期にトロント市内で基金巡回展「現代日本デザイン100選」を開催。こうした連動企画は、日本の現代デザインを紹介するよい機会となり、特にデザイン展は地元のマスコミから多くの反響がありました。また、芥川賞作家の多和田葉子氏を迎え、日本語・英語・ドイツ語を織り交ぜた講演会を行いました。トロントの王立オンタリオ博物館（ROM）の高円宮殿下日本ギャラリー開設記念行事として行われた能公演（観世流）への助成も行いました。

日本語教育の分野では、日本語教育アドバイザーをアルバータ州に派遣し、カナダ全体における日本語教育の促進に力を入れているほか、テレビ会議方式による遠隔地日本語教育への支援、日本語教師向けのワークショップ実施を通じた教師の支援などを行っています。

明るく開放感のあるホール入り口

桂小春團治氏による古典落語公演

メキシコ事務所

中南米で多くの日本文化を紹介し
関心を高めることに成功

文化芸術交流事業としては、現代写真展「Out of ordinary/extraordinary」や「自然に潜む日本」展など3つの巡回展を国内8都市で開催したほか、国立シネマテークで新藤兼人監督作品の特集上映を開催。これらの催しは当地の有力紙でも取り上げられるなど、日本の芸術に対する関心を高めることができました。

また、秋にはスペイン語で日本の芸術に関する情報を発信するためのウェブサイト「Arte en Japon」（http://www.fjmex.org/arte.japon/）を開設しました。

この他、メキシコに在住する茶道や華道の専門家を近隣国に派遣して、中米諸国における日本文化紹介事業にも協力しています。

メキシコでの日本語学習者数は年々増加しており、2006年には6,300名余りとなりました。こうした日本語教育の進展に対応すべく、当地の教師会と協力した日本語教師への研修会の実施や地方における弁論大会の支援などにより、日本語教育の基盤強化に努めました。

日本研究の分野では、メキシコを中心とするスペイン語圏の日本研究者による「イベロ・アメリカ日本研究学会」の設立を支援。今後ともその活動に協力することにより、中南米における日本研究の発展を目指します。

メキシコ事務所図書室

グアダラハラ国際図書展で日本の図書を紹介